慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	松村正義著『金子堅太郎：槍を立てて登城する人物になる』
Sub Title	Matsumura, Masayoshi "Kaneko Kentaro"
Author	池井, 優(Ikei, Masaru)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2014
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.87, No.10 (2014. 10) ,p.55- 61
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20141028-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

松村正義著『金子堅太郎——槍を立てて登城する人物になる』

金子堅太郎といえば、NHKテレビの大河ドラマにもなった司馬遼太郎の国民的文学『坂の上の雲』にも登場する人物である。日露戦争の際アメリカの対日世論を好転させるべく渡米し、活動した人物として描かれている。ペリーが来航した一八五三年に生まれ、一九四二年関係の深かったアメリカと日本が戦争に突入した翌年八十九歳の長寿を全うして亡くなるまで幕末、明治、大正、昭和と激動の時代を法律家、経済政策通、遊説家、国際交流人、歴史家……などさまざまな活動を展開、多彩な生涯を送った。しかし不思議なことにこれまで、金子堅太郎の本格的な評伝が刊行されたことはなかった。

では、著者はなぜ金子に惹かれ評伝を刊行するまでになったのであろうか。一九七一年七月に遡る。アメリカ大統領ニクソンが中国を訪問するとの発表がなされた。日本政府にこの知らせがもたらされたのは、正式発表のわずか三十分前のことであった。最大の同盟国と信じていたアメリカの「頭越し」による対中政策の突然の変更は〝ニクソンショック〟として、佐藤首相はじめ日本にアメリカへの不信感が拡がっていった。ニューヨークの日本総領事館で広報文化担当領事として勤務していた著者のもとに東京の本省から「アメリカ人にもっと日本人のものの考え方を強く広報し理解させよ」との相次ぐ指示がなされ、行動した。そうするうち、日露戦争当時ニューヨークを中心にアメリカの対日世論の形成に活躍した金子堅太郎の例を思いついた著者は資料を収集し、調査を進めていった。その成果は『日露戦争と金子堅太郎—広報外交の研究』となり、慶應義塾大学に提出された学位論文ともなった。こうして金子に関する研究をスタートした著者は外務省から大学に職場を移し、授業を担当するほか、教育行政に携わったり、幅広い国際交流史の著作に専念したり、日露戦争一〇〇年を機会に高まった同戦争への関心から同学の士と「日露戦争研究会」を発足させ会長として記念シンポジウムの開催、研究書の編集など、金子への関心は持ち続けこつこつと文献と資料は集めていたものの、評伝の執筆になかなかとり

かかることができなかった。しかし、本格的に金子の伝記を一書にまとめる時間を得て、八十歳を過ぎてようやくライフワークともいうべき評伝の刊行にこぎつけたのである。

では、本書の内容をまず目次によって知ることにしよう。

はじめに――その多才な人物の本領は何だったのか

第一章　生い立ちから米国留学まで

1　「槍を立てて登城する人物になる」

2　米国留学へ

3　ハーバード大学での日々

4　二、三の留学エピソード

5　「太平洋に〝浮かぶ宮殿〟」に帰る

6　再び東京へ

第二章　明治憲法の起草に参画

1　保守的政治理論を紹介した著書『政治論略』

2　伊藤博文の秘書官に

3　憲法の草案作りと発布

第三章　欧米諸国へ議院制度の調査旅行

1　帝国議会の開会までに

2　世界旅行の始まり

3　初めてのヨーロッパ

4　しばしロシアの大地に踏み入って

5　イタリアで省察した海外広報への所信

6　イギリス議会での調査収穫

7　T・ルーズベルトとの出会いの真相

8　日本法律学校の初代校長に就任

第四章　「条約改正」とジュネーブ国際公法会議

1　日本人で初の国際公法会議準会員

2　新しい学問・経済学を研究せよ

3　ジュネーブ国際公法会議

4　インド洋を経て帰国

第五章　日清戦争と閣僚への道

1　日清戦争を奇貨として

2　念願の司法大臣へ

3　米友協会の誕生

第六章　日露戦争と米国遊説

1　伊藤博文の密命「アメリカを取り逃がすな」

2　武士道とアンダードッグ観の広報活動

3　「余は日本の為めに周旋の労を執るを辞せざるべし」

第七章　ポーツマス会議と〝影の全権委員〟

1　「連鎖ノ任」に就く

2　金子に知らされなかったロシア皇帝の譲歩

3　桂・ハリマン覚書の破棄と高平・ルート協定の締結

4　伊藤博文の暗殺事件

第八章　日米協会初代会長と枢密顧問官
1　米友協会から日米協会へ
2　深刻化する日本移民問題と度重なる不運事
3　枢密顧問官として活動
第九章　日本近代史の編修者
1　歴史家としての素質
2　『維新史』と『明治天皇紀』
3　伝記の記述方法に思案する
4　明治天皇聖徳記念絵画館の建設
第十章　太平洋戦争の勃発と金子の死去
1　一九四一年一二月上旬の金子の『日記』
2　ニューヨーク・タイムス紙の追悼記事

目次の項目を一瞥しただけでも金子がいかに長期にわたり多方面で活躍したかが見てとれよう。

福岡藩士の長男に生まれた金子はすでに四歳の時、修験者が「この子は槍を立てて登城する人物になろう」と見立てたほどの秀才であった。藩校の修猷館でみっちり漢学を学び、やがて東京に出て漢学から洋学に転向する決意をした金子に旧藩主黒田長薄の命により黒田家の出資によってアメリカへの留学が決まる。ボストンに落ち着き、まずライス普通学校で英語を学んだが、ここでの最大の収穫はデクラメーションと呼ばれる演説の仕方を学ぶ課目で鍛えられたことであった。それが後の雄弁家、日露戦争の折日本の立場をアメリカ人に説く適任者を準備することになる。やがて金子は名門ハーバード大学のロー・スクールに入学し、徹底的に法律を学んだ。一年前にこのロー・スクールで学んでいたのが文部省官費留学生としてやってきた後の外務大臣小村寿太郎であった。小村が勉学一筋であったのに対し、金子は勉学面と同時にハーバードの他学部の教授や地元の上流社会の人々を週末に訪問したり晩餐に招かれたりするなど社交面でも活躍し、人脈を広げていった。八年に及ぶ留学を終えて帰国した金子はエドマンド・バークの保守的政治思想を紹介した著書『政治論略』を刊行して伊藤博文に見出され、明治憲法の起草に参画することになる。やがて欧米諸国の議会制度を調査する旅行の途上、将来アメリカを担うような人物――国家公務員試験制度委員長のセオドア・ルーズベルトの知己を得る。後の大統領ルーズベルトと金子はともにハーバードの出身であるが、在学中は学部が異なり「二人はクラスメート」は俗説である。

約一年に及ぶ欧米旅行から金子はいくつかの大きな成果を得て帰国するが、著者はそれを次の四つにまとめる。

（1）一国の憲法には、その国の歴史がなければならない。

（2）一国が海外広報活動を行う場合には、その国の新しい事情を記した著作を国際的な言語で大量に刊行し配布することが大切である。

（3）これからは、新しい学問として経済学を学ばなければ政治はおこなえない。

（4）新興の大国アメリカの未来の大統領と面識を得たことは、何にもまして大きな収穫であった。

帰国後、山県有朋の推挙で日本法律学校（後の日本大学）の初代校長に就任と同時に慶應義塾の法学部開設にも関与するなど、日本における法律学研究の学生、研究者の教育と養成に力を注ぐことになった。また経済学の研究に着手し、著書『経済政策』を刊行するまでに至る。農商務次官に就任すると日清戦争に対応するため八幡製鉄所と商業会議所の創設をおこない、農業立国論を採らず商工立国を指向すべきだと主張した。そして農商務大臣に就任し、労働者を保護する工場法立法も考えるが、やがて念願の司法大臣の座に就くことになる。しかし政変のためわずか六カ月の在任に終わり、司法官連袂事件もあって伊藤博文に叱責されるなど、残念ながらその法律の専門知識を生かすことはできなかった。だが、金子に適任のポストが用意された。アメリカから帰国した日本人が作っている日米親善の組織はいくつかあったが、それを統合した米友協会の会長に就任し、ペリー提督上陸の記念碑建立を実現したのである。

日露戦争の勃発とともに、「アメリカを取り逃がすな」との伊藤の熱心な要請により、金子は五度目の渡米をおこなう。日本がロシアの強欲と無理解のため止むを得ず戦いに訴えるに至ったことをアメリカ国民に周知徹底し、また黄禍論の再発を防ぐと同時に高平駐米公使（当時）と密接な連絡をとりながら対米関係を緊密にする重大な使命を帯びての渡米であった。

金子は旧知のルーズベルト大統領のアドヴァイスを得ながらニューヨークを中心に東部の諸都市で講演、新聞や雑誌への寄稿、大学関係者、知識人対象の集会など、アメリカの日本への見方を好転させるべく一年余にわたってあらゆる努力を払い、ついに対日世論を八割方親日化することに成功した。さらに講和に向けて隋員を通じてイエール大学に接触し、講和条件についてシンポジウムを開催してもらい、その成果を「覚書」としてきたるべき講和会議に備えた。日本は領土と賠償金を求めるべきではないとの「覚

書」の見解はまさに会議で紛糾するであろうと思われる点を指摘していた。講和会議が近づくと金子は広報大使としての自分の役割は終わったと考え、活動も控えて静かに時局の経過を観察するようになる。講和会議が大西洋岸北部の軍港ポーツマスでの開催が決まった時点で、金子はルーズベルト大統領の〝夏のホワイトハウス〟ニューヨーク郊外にあるサガモア・ヒルの別荘に招かれた。大統領と金子は日本の戦後政策について話し合ったが、将来日本はアジアに対して非干渉の〝モンロー主義〟を採るべきだとの見解を大統領が語ったのが印象的であったという。

ポーツマス講和会議が開始されると主役の座は全権の小村寿太郎外相に移り、会議直前から会議の全期間を通じて日本側の広報活動が消極的になったのに対し、ロシア側はウイッテ全権の登場とともにすさまじい広報宣伝活動を展開、ジャーナリストをはじめアメリカの対日、対露世論は逆転したかの様相を呈した。しかし、ルーズベルト大統領は日本の要求を受け入れるようにロシア側を説得、ロシアは樺太の南半分を日本に譲渡することに同意したのであった。不思議なことにこのロシアの譲歩について大統領は金子に一切語らず「日米外交史上の謎」であるという。帰国後、金子はアメリカ国民に対する見事な広報活動と講和斡旋における大統領との親密な連携プレーが高く評価され、枢密顧問官に親任され、男爵から子爵に昇爵した。

ここまでが、金子の人生のなかで輝いていた時期であった。日露戦争後、ワールドパワーの一員となって世界の舞台に登場してきた日本は、アメリカにとって警戒すべき国となり、日本においても日本移民排斥をめぐって対米不信が拡がり、金子は日米協会の会長として「国民外交」の展開に力を注ぐようになる。しかし、親交の深かったルーズベルトの死去、日米協会に理解のあった原首相の暗殺、ハーディング大統領、ワシントン会議をまとめた加藤友三郎の相次ぐ死去を目のあたりにし、さらに関東大震災によって愛娘をはじめ貴重な蔵書と明治憲法、日露戦争関連の文書、書簡を失うなど相次ぐ不幸によって、失意のうちに日米協会会長を辞任する。日米移民問題のこじれからアメリカに裏切られたと感じた金子は、老齢化とともに次第に嫌米化していく。ロンドン海軍軍縮条約の批准をめぐる浜口内閣の措置を統帥権干犯と批判し、美濃部達吉教授の「天皇機関説」を論難するまでになった。その姿勢はグルー大使が「日本における米国のもっともよき友人という伝説的後光に包まれているが……根本的にはもっとも友好的でない」と批評するほどであった。

金子が晩年に力を注ぎ、後世に残った仕事は日本近代史の編集者としての仕事であった。まずアメリカ留学を学資の面で可能にしてくれた福岡の旧藩主黒田家への恩義に報いるため、同家の始祖黒田官兵衛の伝記を『黒田如水伝』として刊行、さらに浩瀚な『明治天皇紀』、『維新史』を編纂し完成させた。その際欧米諸国の偉人伝なども調査して、伝記の記述の方法に工夫を凝らし、年代順に記述すると同時にその日、その日の出来事についても簡潔な説明を加え、歴史に新しい視点を盛り込むようにした。さらに明治神宮外苑の聖徳記念絵画館の完成にも尽力した。

一九四一年十二月八日、日米開戦と日本陸海軍の目覚ましい戦果に「祝賀」と日記に記す。翌四二年五月十七日八十九歳で天寿を全うした。六月のミッドウェイ海戦において日本海軍が大敗北を喫する直前のことであった。太平洋戦争激戦の最中にもかかわらず、ニューヨーク・タイムス紙は「金子伯爵逝く。平和の唱道者。八十九歳。枢密顧問官、日本憲法の起草に参画。ポーツマス講和会議への代表。セオドア・ルーズベルトの友人――日米間の友好を説いた……」と一コマ数十行にわたる長文の追悼の辞を掲げた。

ニクソンショックがきっかけとなって金子堅太郎の広報外交への関心をもった著者は以後「金子研究への誘惑に駆られっぱなしの連続」となり、『日露戦争と金子堅太郎――広報外交の研究』（新有堂、一九八七年）刊行以来、金子研究の虜になった。以後こつこつと文献と史料を集め、それらを読みこんでいった。金子ゆかりの地を訪れ、写真に収めるなどまさに金子に関することなら、労をいとわず評伝の執筆に情熱を燃やし、それが結実したのが本書である。生い立ちから死去までさまざまな活動の足跡がエピソードを交えながら紹介される。だが、著者は金子を無条件で賛美するようなことはしない。日本の躍進に伴い、中国人、朝鮮人への蔑視が生じたことや、日米戦争回避に努力し、今日でも高く評価されている知日派のグルー大使とは「馬が合わなかった」ようだと指摘している。また、日米開戦と緒戦の目覚ましい戦果を祝ったのは、日本移民法案が議会を通過して以来嫌米化した金子の「偽らざる気持ちであったかもしれない……、彼はアメリカ人的気質を持ちながらもやはり日本人であったのである」との記述など、時代とともに変わりゆく金子を描いている。

金子堅太郎のあまりにも多岐にわたる活動に著者は「自書を語る」のなかで次のようにいう。「金子を巡る研究者にとって、彼の本領は一体何だったのか。法律家だったのか、経済政策通だったのか、国際交流家だったのか、それ

とも歴史編纂家だったのか。金子の研究者は苦慮させられるに違いない。結局、浅慮の結果として筆者が到達した結論は、彼は、弁舌に長けた社交家だったという素質を基礎に、足掛け八年に及ぶ米国留学で鍛えた抜群の英語力を駆使して近代日本の発展を世界に広報し続けた〝国際人〟であったということになろうか」。

金子堅太郎研究に取り組むこと四十年余、本書が大学のテキスト、学術書の刊行で定評のあるミネルヴァ書房から「ミネルヴァ日本評伝選」の一冊として上梓されたことは、今日的にも大きな意味がある。周知のように、従軍慰安婦、南京事件、歴史認識など中国、韓国が仕掛ける「日本悪玉論」の世界に向かっての宣伝、広報活動は目に余るものがある。日露戦争時の金子が展開した日本の広報活動を学び直すためにも本書が世に出たことを喜びたい。

（ミネルヴァ書房、二〇一四年、二八四頁）

池井　優